

論文

# ソウルの植民地経験と反日表象空間のメカニズム

— 朝鮮総督府庁舎と朝鮮神宮を中心に —

中村 香代子\*

構成

序

- 1 植民地都市ソウルの特徴
  - 1-1 植民地都市
  - 1-2 日本によるソウルの改造
  - 1-3 ソウルの内部構造
- 2 ソウルにおける日本の象徴
  - 2-1 朝鮮総督府庁舎
  - 2-2 朝鮮神宮
- 3 ポスト=コロニアル時代の反日表象空間
  - 3-1 二つのランドマークの破壊と再利用
  - 3-2 反日表象空間

結語

序

近代国民国家の成立には、「国民」という言説をつくり出す様々な「伝統の創出」[Hobsbawm and Ranger 1983]が不可欠であった。近代日本でも、天皇の儀式やページェントが天皇を中心とする「臣民」共同体の形成と深く関係してきたと言われている[多木 1988, Fujitani 1996]。同様に、都市の景観も、国民統合と不可分であった。都市は、近代において、国家を象徴するアリーナと変貌した。幕府の都・江戸は、天皇を中心とする国民国家の帝都・東京へと改造された。東京の景観は、記念碑などに彩られ、「臣民」の共同体を想像する

装置として機能したのである。

植民地朝鮮の都市においても、装置としての景観づくりは実践された。李氏朝鮮時代「漢城」と呼ばれた都市は、「京城」に名称変更され、日本の植民地都市として改造された<sup>(1)</sup>。日本の表象空間がソウルに移植され、ソウルのイメージは、劇的に変化したのである。このようなソウルの植民地経験は、現在のソウルの景観づくりと決して無関係ではない。むしろ、この植民地経験こそが、現在のソウルを形づくっているといっても過言ではない。「京城」は戦後、韓国の首都「ソウル」として再構成された。だが、ポスト=コロニアル都市「ソウル」には、常に「京城」の亡霊がつきまとい、「ソウル」の空間言説にいまだに影響を与えている。本稿では、こうしたソウル<sup>(2)</sup>の都市イメージの時代的変遷とそのメカニズムとを考察したい。

ケビン・リンチによれば、都市のイメージとは、基本的に観察者と観察されるものとの相互作用によって決定される。そのうえで、都市計画者は、(1)記号による仕掛けを用いる方法、(2)観察者を再訓練する方法、(3)環境を改造する方法などによって、都市のイメージづくりに介入できるとした。さらに、リンチは、都市

\* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程6年(指導教員 多賀秀敏)

のイメージに影響もたらず物理的要素を、機能的に、パス（道路）、エッジ（縁）、ノード（接合点、集中点）、ディストリクト（地域）、ランドマーク（目印）の五つに分類し、都市のイメージ分析方法を提示した。このような方法に準じて、ソウルのイメージの変化を、日本による五つすべての要素の改変に注目して分析することが可能であろう。しかし、それらすべての要素に関して記述することは不可能である。従って、本稿では、ソウルの空間言説を系譜的に分析するにあたり、五つの要素の中のひとつ、ランドマークに注目してみたい。ランドマークとは、周囲の環境の中でひととき目立ち、特異なものとして認識されるもののことである。

これらを踏まえ、本稿の目的を、(1) 日本の植民地支配の文脈で作られたランドマークが、伝統的都市ソウルの景観に与えた変化とその意味、(2) 植民地時代に作られたランドマークがポスト＝コロニアル時代の韓国の文脈において、再構成される経緯、の二点の解明に置く。また、本論に入る前に、本稿が、戦後アジア地域の課題である歴史認識問題の解決には、靖国神社参拝や歴史教科書問題等に加えて、記念碑や博物館など、都市空間に存在する歴史表現に関する研究が必要である〔テッサ・モーリス 2004〕という問題意識に立脚していることを予めことわっておこう。以下、植民地期ソウルを対象とする都市社会学、建築学、歴史学、海外神社に関する先行研究に依拠し<sup>(3)</sup>、植民地期ソウルの都市空間とポスト＝コロニアル時代の都市空間との相関関係を考察していく。

## 1 植民地都市ソウルの特徴

### 1-1 植民地都市

夏鑄九の言葉を借りれば、植民地都市とは、「植民地的従属性 (colonial dependency)」の具現の場であり、社会関係の非対称性が表わされるところである〔夏 2000 (2001):38〕。植民地都市とは、宗主国のモデルや規範が移植され、被植民者はそれを受入れるという不均衡な関係性が実践される空間であるといえる。西欧の「植民都市の景観は、西欧都市の複製 (コピー) として、西欧の都市計画理念と技術に基づいて形づけられる」〔布野 2005:12〕と言われる。それに対して、日本の植民地都市は、日本の近代化が西洋近代化の輸入を伴って成立したことを反映している点で西欧植民地都市と異なっている。つまり、日本の植民地都市へのモデルや規範は、日本的なものと同様近代化のものが混在しているのである。

橋谷は、日本の植民地都市の特徴をまとめ、具体的に、日本の植民地都市を在来社会との関係性を基点にして、(1) 日本の植民地支配とともに形成された都市、(2) 在来社会の伝統的都市の上に形成された都市、(3) 既存の大都市の近郊に日本が新市街を建設して形成された都市、の三つに比較分類している〔橋谷 1993:222-223, 2004:11-12〕。ソウルは、(2) 類型の都市として、平壤・開城・台北・台南などの伝統的城壁都市と同じカテゴリーに位置づけられ、現地社会の景観が残ったまま、日本人街が並行して発達していく特徴があるとしている。

伝統的都市が植民地都市へと改造されて行く過程は、単純にAからBへと移行するようなものではない。伝統的な都市には、景観や自然、

建築などによって意味付けられた「場所」が存在している〔中谷 2005: 67〕。植民地都市への移行は、「場所」の記憶を持ちながら、宗主国の意向でその「場所」が改編されることである。言い換えれば、伝統的都市から植民地都市への変化とは、宗主国の優位の下に伝統的な空間言説を再構成することである。従って、植民地都市ソウルは、在来社会が残した要素、日本の要素、西欧近代的な要素が混ざり合っ、形成されたものであると言える。

### 1-2 日本によるソウルの改造

日本は、意味付けられた「場所」の破壊と新しい「空間」の創造を通して、伝統的都市ソウルのイメージを変化させた。都市としてのソウルの歴史は、1394年太祖の「漢城」遷都に始まる。「漢城」は、朝鮮の歴史的な信仰、風水地理説によって選定されたとされている。都市の造営原理は、陰陽五行説や井田法を内包する『周礼』冬官考工記が応用されたとされている〔孫 2004 (1990): 33-49, 吉田1992: 102〕。また、「漢城」の空間構成には中国の都城原理のなかで継承されてきた9:6の黄金比が貫かれているとの見解もある〔孫: 2004 (1990): 40-42〕。これらの造営原理の上に築かれた景福宮、昌徳宮などの宮殿、宗廟、門などは、「漢城」のランドマークとして機能し、「漢城」の空間を秩序立てていたのである。

「漢城」の造営原理、特に風水原理を逆利用して、総督府が朝鮮に不利になるよう意図的に都市改造をしたという見解が韓国を中心に存在する。しかし、現段階では、日本がどの程度、朝鮮の伝統的風水原理に対して意識的に都市改造を行ったかを客観的に説明するには限界があ

る<sup>(4)</sup>。ただ、植民地期日本による都市改造が、象徴的な建築や空間と関係しながら、結果的にソウルの都市の文脈を強引に再定義したことは史実からも明らかである。

日本人がソウルに居留しはじめたのは、1880年代であるが、ソウルの景観がランドマークの撤去、改築、新築を通して、著しく変わるのは20世紀に入ってからのことである。伝統的都市のランドマークである宮殿は、韓国併合以前より、日本の意向の下に、撤去、改築された。宮殿が転用され、動物園、植物園、博物館などへと改造された事例もある<sup>(5)</sup>〔李: 2004〕。また、それまでの景観になかった様式の建築物は、植民地ソウルの新しいランドマークになった。朝鮮の伝統的建築にない建材や建築方法は、ソウルの景色に異質な要素を組み込んでいった。新しいランドマークは、二つの様式によるものであった。一つは西洋風建築であり、もうひとつは日本の伝統的建築である。この二つの様式が植民地都市ソウルに導入されたことは、日本の特異な近代化過程が関係している。大まかに言えば、政治経済に関係する場所や公共建築には、西洋風建築が応用され、神社などの日本の文化や精神に関係するところには、日本の建築が用いられた。西洋近代化を植民地都市に啓蒙しようとする立場と天皇制を基軸に日本の独自性を誇示しようとする日本の二つの顔がソウルの都市空間の中で表現されていたのである。

### 1-3 ソウルの内部構造

日本による都市の改造は、ソウルの中で等しくなされたわけではない。ソウルの改造は、ソウルの内部分離を顕在化させた側面がある。植民地期ソウルには、日本人と朝鮮人の空間分離

があり、清溪川を境に、南に日本人区域、北には朝鮮人区域があった。その分断は、居住空間に限られず、商店街や娯楽施設にまで浸透していた（橋谷：2004：31）。ソウル都市空間の二分化構造は、行政区画においても明確であった。1914年の「朝鮮総督府京畿道告示第七号」公示により近世朝鮮以来の行政区画制度が解体され、日本人街の南部区域には「町」制が新たに適用される一方、朝鮮人街の北部地域では旧来の「洞」制を踏襲したのである<sup>6)</sup>。

この二分化構造は、経済的身分差別や住環境差別でもあった〔橋谷 2004：73-76、全：2006：210-228〕。もともと地質の悪い地域であった南部区域が日本の都市改造に伴って整備されたのに対し、朝鮮人街である北部区域では、都市の人口流入が激しく、貧困層が増加していた。加えて、植民地期ソウルのイメージを構成する新しい日本の西洋風建築は、景福宮前に建てられた朝鮮総督府を除けば、南部区域に偏っていた。ソウルの都市改造によって、改善された日本人区域と環境悪化する朝鮮人区域とのコントラストが可視化されていたのである。

全遇容は、日本によって非対称的二分化構造へと変容したソウルに対して、朝鮮人は「無力感」と「悲しみ」を感じ、「怨恨」を抱いたと論じている〔全 2006：230-231〕。1919年の3.1運動は、朝鮮人街である北部区域のタブコル公園を舞台にして展開し、日本からの独立を訴える人びとが集まった。このように、住民たちの内部構造は、日本人の住む南部区域と朝鮮人の住む北部区域とに別れていた。植民地期ソウルにおいては、支配者と被支配者の差別的格差が存在しており、それぞれに都市改造に対する認識が異なっていたことが推測できる。

大正から昭和への転換期において建てられた、朝鮮総督府庁舎と朝鮮神宮というランドマークは、二分化されたソウルの都市一帯を囲い込むように配置されている。それまで日本のランドマークが少なかった北部区域の中心に総督府庁舎が据えられ、一方、ソウルを一望できる南部区域の高台に朝鮮神宮が立てられた。こうした二つのランドマークの建設は、日本のソウル改造の中でも、最もインパクトのあったものである。これら二つの造営は、元来一対の国家的プロジェクトとして組まれたものであり、補完的にソウルのイメージを変容させた。以上のことを踏まえ、次節では総督府庁舎と朝鮮神宮について詳しく考察する。

## 2 ソウルにおける日本の象徴

### 2-1 朝鮮総督府庁舎

1926年、景福宮の前に立ち上がるように朝鮮総督府庁舎は完成した。総督府庁舎は、宮殿内の公式儀式が執り行われる勤政殿を市街地から隠した。それは、朝鮮王朝のランドマークが、日本植民地のランドマークへと再構成されることを意味していた。20世紀初頭から日本で活躍していたドイツ人建築家、ゲオルグ・デ・ラランデにより構想された白い庁舎<sup>7)</sup>は、日本の朝鮮統治と近代化の象徴として、ソウルの中心に建立された。庁舎は、『京城案内』に、「復興式五階建て、花崗石張鉄筋コンクリート造、各階總建坪九千六百餘坪、中央塔の高さ百八十尺、東洋一の建築物」とあるように、当時の都市空間の中で、ひととき圧倒的な印象を与えるものとして伝えられていた。総額6,751,982円を投じた庁舎は、その建築材の多くが朝鮮から調達されたことや、朝鮮人や中国人を安い労働力

として使用したこと〔岩井 1926: 2-6〕を考えると、金額以上の豪華なものであった。また、「廳内の大ホールの壁畫は和田三造氏の作で内鮮融和の象徴たる神話を題材と」〔京城府教育会 1926: 26-27〕するなど、日本の権威の表象空間としてつくられていたのである。

朝鮮王朝の王宮として創建された景福宮は、日朝の歴史を語る上でシンボリックな場所である。というのも、1395年に建立された景福宮は、1592年の文禄の役（壬辰倭乱）で、全焼させられた過去をもつからである。焼失の後、景福宮は約270年もの間放置された。したがって、総督府庁舎が建てられて改編させられた景福宮とは、1865年、新たに興宣大院君が復元したものである。皮肉にも、過去に日本によって失われた景福宮は、また再び日本の支配のもとに改造される運命をたどった。新しい景福宮が実質的に王宮として使用されたのは、1895年の乙未事変の後、高宗がロシア公使館にその身を移すまでの30年であった。

景福宮の改造は1910年韓国併合直後から行われ、宮殿内の勤正殿と慶会楼を除く大部分の建築物が撤去、払い下げされた〔京城府 1982 [1934]: 474-476〕。1912年の段階で既に、景福宮は総督府に移管され、総督府の新庁舎移転が決定していた。1915年の施政五周年記念物産共進会の開催は、景福宮というランドマークを日本支配の文脈で改造する契機となった。物産共進会を前に、殿閣は博覧会会場として作りかえられたのである。また、宮殿内に西洋風二階だての建築、朝鮮総督府博物館も建設された<sup>(8)</sup>。こうした改造は、宮殿内の景色を明らかにそれまでと違うものにしたのである。景福宮が一般の人びとに公開されたことも、大きな変

化であった。神聖な場所が日本の介入によって、強引に開かれたのである。総督府庁舎の着工は、物産共進会開催翌年の1916年であるから、このような景福宮の改造は、韓国併合後、絶え間なく行われていたことになる。

朝鮮王朝のランドマークを日本の支配の文脈のなかで改造し、再解釈をする行為に対し、日本人からも批判されている。「考現学」を提唱した今和次郎は、総督府庁舎を「露骨」だと評した〔今 1923: 17-18〕。また、総督府建築に伴う光化門取り壊しをめぐることは、柳宗悦が鋭く批判した〔柳 1922: 22-29〕。最終的には、光化門の取り壊しは、移設へと変更され、残されることになった。しかし、このような批判が日本人の中から出てきたという事実は、景福宮の改造光景を目にする多くのものたちが、その改造を日本のあからさまな意図によってなされたものとして認識していたことを示唆している。

## 2-2 朝鮮神宮

日本人居住区の南部地域に位置するソウル南山は、「複数の神社の境内コンプレックス」〔青井 2005: 30〕であり、日本人の文化・精神的なシンボルであった。南山北麓には、京城神社（前南山太神社）、西麓には、朝鮮神宮（前朝鮮神社）、西南麓には、京城護国神社が造営されていた。また、京城神社に隣接す公園には、1900年建立の日清戦争の戦没者慰霊碑、甲午記念碑や八角形の音楽堂があった〔京城居留民團 1912, 1915〕。

南山は、もともと漢城を守る風水地理説でいうところの「案山」であり、山頂には国師堂があった。朝鮮王朝が官有地として保護していたため、南山は、朝鮮王朝において、神聖視され

た場所であったと考えられる。しかし、一方、日本人にとっても、南山の北麓「倭城台」は、日本人居留当初から、縁のあるところと考えられていた。というのも、文禄の役（壬辰倭乱）で、石田三成、増田長盛が陣を張った場所とされていたからである。そのつながりもあって、日本人による南山への関与は、韓国併合以前の早い時期からはじまっている。1897年に、倭城台公園を造営し、翌年には京城神社の前身南山太神宮を祀り、1910年には西麓に漢陽公園をつくった。南山は、比較的早くから日本人にとって特別な場所として位置づけられたのである。

朝鮮神宮の鎮座が南山に選ばれた理由はいまだ明確でなく議論されているが<sup>9)</sup>、朝鮮神宮は、観光名勝の地になるほど、ソウル都市を見下ろす場所にあった。そして、北のランドマーク朝鮮総督府と南のランドマーク朝鮮神宮は、まさにソウルを南北で挟み込む位置にあったのである。

朝鮮神宮は、朝鮮の中で、近代国家日本の象徴としての意味合いの最も強い神社であった。海外神社には大きく分けて、居留民が自発的に神を祀ったものと、国家主導で建立したものがある。後者にあたる朝鮮神宮は、京城府の地域を守る京城神社と異なり、植民地朝鮮の総鎮守であり、「官弊大社」という社格のついた日本の植民地朝鮮を代表する神社であった。

朝鮮神宮のあり方は、文化政治のなかで唱えられた「内鮮融和」に伴い、当初論争の対象になった。神道家の一部からは、朝鮮神宮には、朝鮮の土着性や地域性を配慮して、朝鮮神話の「檀君」、朝鮮に縁があるであろうとされる「素戔鳴尊」を祀るべきであるという主張や、朝鮮の風俗を念頭に入れた建築、祭儀の様式を

取り入れるべき意見がでていた〔小笠原 1954: 57-81, 菅 2004: 111-157〕。にもかかわらず、最終的には、朝鮮の地域性は取り入れられず、「純粹な」日本性の具現に留まった。結果、朝鮮神宮は、日本の神話の象徴天照大神（皇祖神）と近代国家を創設した明治天皇の二つの祭神を祀った。

また、朝鮮神宮の建築は、西洋風建築の総督府庁舎とは対照的に、極めて日本的な建物であった。明治神宮や靖国神社の鳥居を手がけた建築家・伊藤忠太により、伊勢神宮の建築様式と同じ「神明造」の様式がとられた。建築材においても、木材が優先的に用いられ、一部は日本から運ばれた〔岩井 1923: 12〕。朝鮮神宮は、朝鮮の神社ではあっても、「日本の神々を祀る社殿は、純日本式が宜しい」〔伊藤 1926: 17〕との見解から、日本的な建築表現が採用された。皇民化運動で、参拝強要の舞台となった朝鮮神宮とは、日本の文化的ナショナリズムを投影した場所に他ならなかったのである。

### 3 ポスト＝コロニアル時代の反日表象空間

#### 3-1 二つのランドマークの破壊と再利用

朝鮮総督府庁舎と朝鮮神宮というランドマークの造営は、伝統的都市「漢城」のイメージを日本の植民地「京城」に変えたことは前節でみてきたとおりである。当然ながら、言論統制が厳しかった日本支配の下で、朝鮮人の立場から、日本の都市空間改造に対して、批判・反対することが難しかったのは言うまでもない。しかし、戦後、一部の朝鮮人の日本のランドマークへの認識は、同じランドマークの上で表現されるのである。つまり、日本支配のランドマー

クの再文脈化である。

神社は、戦争が終わると、朝鮮半島全域で壊滅的に消失する。昔は、「海外引揚神戦報告書」に基づき、海外神社の戦後の神社襲撃・掠奪の実態をまとめている。これによると、「ソウル市内数カ所に『朝鮮神宮と天満宮（京城神社摂社を本社と誤ったものか）を焼払え』とのハンゲル文字のアジビラが貼られ」たと報告されている〔昔 2004: 8〕。戦後の神社襲撃を予想していたのか、朝鮮神宮の御神体は、8月15日午後には、祭神昇天祭を経て、航空機で内地に移された〔昔 2004: 13〕。植民地期につくられた日本のランドマークは、戦後を期に、日本支配の象徴性を理由に破壊の対象にされ、また、支配者側である日本の行政も破壊の対象になることを予測しすばやく対応した<sup>(10)</sup>。これらの状況は、植民地期における空間の権力的性格を被支配者だけでなく、支配者も認識していたことを、はからずも露呈している。しかし、一方、総督府庁舎は再利用されることになる。戦後、総督府庁舎は、政府庁舎、後に国立中央博物館として存続するのである。

崔吉城によれば、日本が植民地期に開発のためにつくった建物や道路は破壊の対象にならないが、象徴的な建物であり、比較的利用性の少ないものは、破壊の対象になったとしている〔崔 1999〕。二つのランドマークは、両者ともに、日本の支配を象徴していた建築物であった。にもかかわらず、神社だけが壊されて総督府庁舎が壊されなかったのは、総督府庁舎の利用性の高さの他に、その様式にも理由があったと思われる。日本が造営していながら、西洋風建築であった庁舎に対する抵抗は、日本建築の神社よりも少なかったように考えられる。戦

後、ソウルの西洋建築は、日本の植民地時代のシンボルでありながら残るものが少なからずあった。ここには、朝鮮人から見た、日本の支配と日本がもたらした西洋近代化とのイメージの違いが反映されているのである。

### 3-2 反日表象空間

1960年代後半、この二つの植民地遺産であるランドマーク跡地に、新たな意味が付加される。折しも、韓国国内政治では、朴正熙大統領が1965年に締結された日韓基本条約に対する反対運動に悩まされている頃であった。かつて植民地期において日本の文化・精神的な象徴空間として作り替えられた南山には、もはや神社はなく、参道が道路として使われている程度に面影を残していた。しかし、この頃より南山西麓一帯が変わりはじめる。1967年には伊藤博文を暗殺した安重根の記念像がつくられ、1963年から企図されていた安重根義士記念館は1970年に開館した。記念館では、安重根の生涯記録や獄中文書などが展示された。記念館から少し下ったところに、1969年、独立運動家の金九の銅像と李始栄の銅像とが建てられた<sup>(11)</sup>。南山公園は、反日の英雄を顕彰する場へと変わっていったのである<sup>(12)</sup>。

一方、1968年、旧総督府庁舎前の世宗路には、景福宮を背にして、李舜臣の銅像が建てられる。これは、日本の植民地期に改造された朝鮮王朝期の道路の中心軸を復元するには資金が足りないで、かわりに世宗路の交差点に日本が最も恐れる人物の銅像を立てるべきであるとする朴正熙大統領の意向が反映されたものだとされている〔中央日報: 2004〕。宮殿内の撤去や改造、そして総督府の建造によって、大きくそ

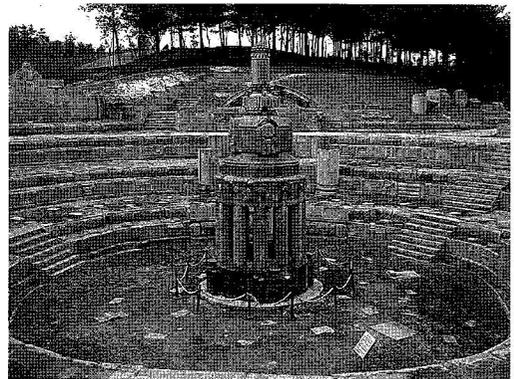
の意味を変えられた景福宮の前に、文禄の役で活躍した李舜臣を立たせることは、旧総督府庁舎に対する韓国政治的態度を表象していると考えられる。これは一種の空間改造を介した政治意識の具現化である。1960年代後半における、日本の植民地期ランドマーク跡地における反日シンボルの建設は、朴正熙政権下の国内政治問題に大きく関わりながら<sup>(13)</sup>、かつて、日本の支配によって改造された都市文脈を新たに再構成する試みであった。このように、戦後、その様式やイメージによって処遇の異なった二つのランドマーク跡地は、1960年代に改編を迫られたのである。



[安重根義士記念館：2007年3月筆者撮影]

1990年代、こうした、日本支配のランドマークの再文脈化がふたたび注目された。1995年8月15日の光復五十周年の日に、旧朝鮮総督府庁舎が解体された。尖塔部分がクレーン車でつり上げられたその解体模様は、テレビでも放映され、ひとつのスペクタクルとなった。この総督府庁舎の解体計画は、90年代に入ってからのものである。全斗煥政権では、旧庁舎は活用すべきであると考えられていたにもかかわらず、1991年盧泰愚大統領は、景福宮復元10年計画を

発表した。これによって、旧庁舎撤去が実現に向けて走り出し、続く金泳三大統領が実行に移した。しかし、当時取り壊しに賛成する韓国国民は半数ほどでしかなかったという[朴：2005：37]。尖塔部分は、現在、天安の独立記念館に移され、建築物の頭ではなく地面に据え置かれている。



[独立記念館に設置されている朝鮮総督府庁舎尖塔部：2007年3月筆者撮影]

日本の植民地期以前のソウルの姿に復元しようとする傾向は現在にまで続いている。日本の景福宮改造にともなって、一度は撤去が計画されたが、結果的に移動させられた光化門は、その後、朝鮮戦争で消滅する。光化門は、朴正熙大統領のもとで、ふたたびつくられたが、2006年になって今度は解体された。日本の植民地統治以前の場所での再建計画がなされているのである。南山公園でも1990年代以降、戦後に立てられた建築物を一部撤去して、植民地支配の前の姿に戻そうとする動きがある。

戦後の韓国では、日本の支配によって改造された跡地が、韓国内政と関係しながら、カウンター・ナショナリズムの表現の場となり、反日の表象空間としてつくりかえられている側面

が見られる。それは、戦後のソウルの都市空間が、植民地経験の反応として形成していることを意味するといえよう。

## 結 語

日本の植民地支配は、ソウルの伝統的な空間言説を日本の文脈によって改造するものであった。特に、新設されたランドマーク、朝鮮総督府庁舎と朝鮮神宮は、ソウル一帯を南北で囲む位置に配置され、日本の植民地支配と日本のナショナリズムの象徴の場として機能していた。これらの日本の暴力的な都市イメージ改造が軽視されるべきではない。しかし、それらのランドマーク跡地が戦後、韓国政治の文脈で読み替えられているメカニズムにも留意が必要であろう。すなわち、植民地支配の都市改造が反転して戦後の都市改造を方向付けているメカニズムである。

負の歴史をいかに語り、いかに表現すべきか、という課題は、狭義の歴史認識問題の中だけにあるものではない。これまで見てきたように、都市空間には植民地支配にまつわる場所が存在し、その場所をどのように未来につなげていくべきか、という問題がある。日本のソウル改造は、朝鮮人の空間言説を尊重せず、支配者の文脈を優先した都市の再構成であった。故に、戦後、朝鮮の人びとにとって、ソウルの都市空間に残された日本の遺物が日本の支配の記憶を呼び起こすものとして見なされたことは想像に難くない。しかし、負の場所を破壊するのがよいのか、保存するのがよいのか、あるいは、新たな場所につくり変えるのがよいのか、という選択は、未来の歴史認識解決におけるひとつの鍵を握る問題である。従って、負の場所の再

構成は、広義の歴史認識問題のひとつとして取り扱われるべき重大な問題であり、熟考を要すべきものであると言えよう。歴史認識をめぐる論争の平和的解決に結びつくような、都市空間の平和的再創造は、今後の重要な課題として認知されるべきであろう。

[投稿受理日2007.5.26 / 掲載決定日2007.6.12]

## 注

- (1) 近年、韓国政府は、ソウルの漢字表記を「首爾」にした。
- (2) 既述のとおり、「ソウル」の名称は時代的に異なるが、以降では、特別な意味で「漢城」や「京城」を使う以外、混乱をさけるため、基本的に「ソウル」と統一する。
- (3) 依拠する先行研究は多分野に渡るもので、以下に簡単に整理する。植民地期ソウルの研究は、建築学、歴史学、都市社会学の分野で進められてきたが、近年学際的になった。孫禎睦は、都市史の視点から植民地期ソウルの都市化の経緯をまとめ[孫 1996, 2000 (1982), 2004 (1994)], 橋谷弘は、日本の植民地都市を比較し、体系化をこころみている[橋谷 1993, 2004]。夏鑄九は、日本の植民地都市台北との比較においてソウルを論じている[夏 2001 (2000)]。植民地都市の理論的分析としては、布野修司の仕事[布野 2005]があげられる。また、景観や文化というパースペクティブを取り入れて植民地期ソウルの言説分析をしたものに、五島寧[1994, 1999, 2005, 2006], 李成市[2004], 全遇容[2006]があげられる。青井哲人[2005]は、植民地における神社を主要テーマとして植民地都市の景観を比較分析している。一方、植民地につくられた神社に関する研究は、1990年代以降議論に広がりが出てきている。菅浩二は祭神論というアプローチから海外神社比較を行い、[菅 2004], 既述の青井は、建築学からの神社論[青井 2005]を試みている。
- (4) 確かに、1930年代、既に日本において朝鮮の風水に関する著作がある[朝鮮総督府編(村上): 1931]。しかし、そのような認識と政策との間に相関関係があったのかについては、不明瞭である。一方、風水思想と日本の都市改造との関連性は、

韓国において大きな争点となった。この論争は、1995年8月15日の朝鮮総督府庁舎解体に影響を与えた。つまり、日本が「漢城」の風水原理を熟知したうえで、地脈を断つために朝鮮総督府庁舎を景福宮の前に建てたという論理が解体論を後押ししたのである。しかし、このような風水地理説に則って、朝鮮を支配するために帝国日本が都市改造を行ったという見解に対しては、多くの疑義が抱かれている〔崔:2002, 朴:2005, 五島:2006〕。

- (5) 昌慶宮は、1907年から博物館への転用が企図され、1909年には、宮殿内に動物園と植物園がつけられて一般に公開されるようになった。1911年には、日本風煉瓦作りの建造物がたてられ、これが李王家博物館の本館となり、李王朝の歴史を帝国日本が媒介となって展示していくことになったのである。また、李王家博物館の設立は、大韓帝国李完用内閣総理大臣と李允用宮内府大臣の意向であると伝えられているが、李成市によると、伊藤博文を始めとする統監府の意志が強く影響したと推測できるという〔李:2004〕。
- (6) ソウルの「洞」については、吉田〔2005〕を参照のこと。
- (7) ラランデは完成を見る前に死亡したため、その遺志は、台湾総督府の設計者野村一郎に引きつがれている。
- (8) この博物館は後に古蹟調査事業を担う機関となった。朝鮮総督府博物館に関しては、李〔2004〕を参照のこと。
- (9) 青井は、設計・監督に携わった伊東忠太の資料から「都市全体の拡がりに『眺望』および『外観』を介して呼应するような、視覚的な関係性あるいはそれに由来する記念性」が選定に影響したと推測している〔青井:2005:50-51〕。それに対して、五島は、最終的な決定が総督府にあったことを強調した上で、「市街を俯瞰する緑に囲まれた高地、という物理的条件が」適合したため、と推論している〔五島:1994〕。
- (10) 昔は、海外神社の「壊滅」を「<日本のアジア侵略と暴政>に対する現地人の復讐の結果というよりも、第一義的には敗戦後の連合軍の処置により、当該『外地』より居留日本人が『内地』へと引揚させられ、維持する社会的主体が消滅したことに起因する」としている〔菅 2004:11〕。
- (11) この他に金庚信將軍の銅像も一緒に建てられた。

- (12) 朝鮮神宮があったところには、1970年に植物園がつけられたが、2006年に閉鎖されている。
- (13) 朴正熙政権と銅像建立については、以下に詳しい。〔チョン・ホギ:1999〕

#### 参考文献

- 青井哲人 2005 『植民地神社と帝国日本』吉川弘文堂
- 青野正明 2003 「朝鮮総督府の神社政策と『敬神宗祖』」『桃山学院大学総合研究所紀要』pp.5-9.
- 青野正明 2006 「植民地期朝鮮における神社の職制・神職任用関連の法令」『桃山学院大学人間科学』vol.30, pp.29-50.
- 五十嵐太郎 2002 『近代の神々と建築：靖国神社からソルトレイクシティまで』広済堂出版
- 伊藤忠太 1926 「神社建築に對する考察」『朝鮮と建築』5(1), pp.3-19.
- 岩井長三郎 1923 「朝鮮神社造営に就て」『朝鮮と建築』2(3), pp.8-12.
- 岩井長三郎 1926 「新庁舎の計画に就て」『朝鮮と建築』5(5), pp.2-6.
- 小笠原省三 2004 [1953] 『海外神社史』ゆまに書房
- 李 哲浩 2004 「李舜臣銅像は『日本の氣を抑えるため』」中央日報 2004.4.9
- 京城居留民團 1912 『京城発達史』
- 京城居留民團 1915 『京城繁昌記』
- 京城府編 1982 [1934] 『京城府史：第一卷』湘南堂書店
- 京城府編 1982 [1936] 『京城府史：第二卷』湘南堂書店
- 京城府編 1982 [1941] 『京城府史：第三卷』湘南堂書店
- 京城府教育会 1926 『京城案内』
- 五島 寧 1994 「植民地『京城』における総督府庁舎と朝鮮神宮の設置に関する研究」『都市計画論文集』(29) pp.541-546
- 五島 寧 1999 「計画技術・制度としての市区改正に関する京城(1912-1937)・台北(1985-1932)の比較研究」『都市計画。別冊, 都市計画論文』(34) pp.865-870
- 五島 寧 2005 「京都市区改正と朝鮮神宮の関係についての歴史的研究」『都市計画論文集』(40) pp.235-240

- 五島 寧 2006 「日本植民地都市計画に見る伝統的  
計画原理の取り扱いに関する論説」『都市計画論文  
集』(41) pp. 893-898
- 國學院大學日本文化研究所編 2004 『神道辞典』弘  
文堂
- 今和次郎 1923 「総督府新庁舎は露骨すぎる」『朝  
鮮と建築』26, pp. 17-18
- 夏 鑄九 (シア・ジュージウ) 2001 [2000] 「植民  
地近代性の構築：日本植民地時代の台湾建築・都  
市史を書き直す」本田親史, 轡田竜蔵訳『現代思  
想』29(5) pp. 34-60
- 菅 浩二 2004 『日本統治下の海外神社：朝鮮神  
宮・台湾神社と祭神』弘文堂
- 孫 禎陸 (ソン・ジュンモク) 1996 『日帝強占期都  
市社会相研究』ソウル：一志社
- 孫 禎陸 (ソン・ジュンモク) 2000 [1982] 『韓国  
都市変化過程研究』松田皓平訳, 耕文社
- 孫 禎陸 (ソン・ジュンモク) 2004 [1994] 『日本  
統治下朝鮮都市計画史研究』西垣安比古他訳, 柏  
書房
- 多木浩二 1988 『天皇の肖像』岩波書店
- 崔 吉城 (チュ・キルソン) 1999 「朝鮮総督府庁舎  
の破壊と『風水』ナショナリズム」『日本民俗学』  
218 pp. 1-24
- 崔 吉城 (チュ・キルソン) 2002 『「親日」と「反  
日」の文化人類学』明石書店
- 朝鮮総督府 1915 『朝鮮施政ノ方針及実績』
- 朝鮮総督府編 1931 『朝鮮の風水』
- 全 遇容 (チョン・ウヨン) 2006 「植民地都市イ  
メージと文化現象：1920年代の京城」『日韓歴史共  
同研究報告書』日韓文化交流基金。第三分科報告  
書, 第二部, 第五章, pp. 207-236 [http://www.jkcf.  
or.jp/history/3/05-0k\\_jwy\\_j.pdf](http://www.jkcf.or.jp/history/3/05-0k_jwy_j.pdf)
- 鄭 雲鉉 (チョン・ウンヒョン) 1999 『ソウルに刻  
まれた日本』武井一訳 桐書房
- チョン・ホギ 2007 「朴正熙時代の“銅像建立運  
動”と愛国主義—“愛国先烈彫像建立委員会”の  
活動を中心に」, 『精神文化研究』2007春号第30卷  
第1号 (通巻106号) pp. 335-363
- テッサ・モーリス＝スズキ 2004 『過去は死なな  
い』田代泰子訳, 岩波書店。
- 中谷礼二 2005 「場所と空間：先行形態論」植田和  
弘他編『岩波講座としての差異性を考える1：都市  
とは何か』岩波書店。pp. 67-99
- 朴 裕河 (パク・ユハ) 2005 『反日ナショナリズム  
を超えて：韓国人の反日感情を読み解く』安宇植  
訳 河出書房新社
- 橋谷 弘 1990 「植民地都市としてのソウル」『歴  
史学研究』第614号 pp. 7-15
- 橋谷 弘 1992 「NIES都市ソウルの形成」『朝鮮史  
研究会論文集』第30集 pp. 121-147
- 橋谷 弘 1993 「植民地都市」『近代日本の軌跡  
九：都市と民衆』吉川弘文館
- 橋谷 弘 2004 『帝国日本と植民地都市』吉川弘文  
館
- 布野修司 2005 『近代世界システムと植民都市』京  
都大学学術出版会
- 山口公一 2000 「植民地朝鮮における神社政策と朝  
鮮人の対応：一九三六～四五」『人民の歴史学』第  
146号 pp. 14-32
- 山口公一 2003 「植民地朝鮮における神社政策」  
『歴史評論』3月号 pp. 53-69
- 柳 宗悦 1922 「失はれんとする一朝鮮建築の為  
に」『改造』9月号, pp. 22-29
- 吉田光男 1992 「漢城の都市空間：近世ソウル論序  
説」『朝鮮史研究会論文集』pp. 91-120
- 吉田光男 2005 「ソウルの近世的地域空間『洞』と  
住民」鈴木博之他編『シリーズ 都市・建築・歴  
史5』pp. 343-373
- 李 成市 (リ・ソンシ) 2004 「朝鮮王朝の象徴空間  
と博物館」宮嶋博史他編『植民地近代の視座』岩  
波書店 pp. 27-48
- Fujitani, T. 1996 *Splended Monarchy: Power and Pegeantry  
in Modern Japan*, Berkeley: University of California  
Press.
- Hobsbawm & Ranger 1983 *The Invention of Tradition*,  
Cambridge: Cambridge University Press.
- Lynch, K 1960 *The Image of the city*, Cambridge:  
Technology Press (邦訳 リンチ 1968『都市のイ  
メージ』丹下健三, 富田玲子訳 岩波書店)
- The Association of Commemorating Martyr Ahn Choong  
Keun Patriot Ahn Memorial Hall 1995 *Ahn Choong-  
Keun, The Great Patriotic Martyr of Korea*, Korea: The  
Memorial Hall of Martyr Ahn Choong-Keun